



煬帝

聖徳太子 と 中国隋の煬帝



聖徳太子

東京教育学院 日本史教授 石森 勇

大和王権から統一国家へ

古墳時代(3～7世紀),日本は,大和の王(のちの大王-天皇)と各地の王(豪族)が連合して大和王権をつくった。

大和王権は中央政庁の朝廷における大王と豪族との秩序づけを氏姓制度によって構成した。5世紀に入ると諸豪族の対立抗争が激化し,6世紀末には蘇我氏が突出する。豪族連合政権の面目を一新して,統一国家日本を天皇が支配することを方向づけたのは聖徳太子である。

聖徳太子は574年に生まれ(現在の明日香村-橘寺),622年49歳で死去した。マホメット(571～632)と同時代。死去年はヒジュラ(メディーナにイスラム国家建設)と同年代。中国は北周の世祖,隋の文帝・煬帝,唐の高祖,インドのヴァルダナ朝ハルシヤ王(606-647)と同時代である。

太子の父は用明天皇,母は穴穗部間人皇后。天皇の母(堅塩媛),皇后の母(小姉君)はともに蘇我稲目の娘だから稲目の子,馬子と太子は祖父と孫の関係となる。太子の4人のきさきのうち刀自古郎女は馬子の娘だから舅でもある。

推古天皇は欽明天皇と堅塩媛の間に生まれ,用明天皇とは姉弟。19歳の摂政聖徳太子と50歳の大臣蘇我馬子は協力して統一国家日本建設の政治改革をはじめ。しかし両者の政治意図には違いがあった。太子の意図は次代の天皇になるべく天皇権力の強化であり,馬子の意図は蘇我氏を中心とする豪族連合強化による実権持続である。両者とも官僚制を基盤にする点では一致していた。

ゆれる東アジア情勢

603年冠位十二階が定められ,604年憲法十七条がつくられた。前者は百済と高句麗の制を参照し,儒教と五行思想の影響がある。後者は西晋の武帝の五条詔書(268),西魏の文帝の二十四条新制(535)。北周の六条詔書(544)をヒントにつくられた。天皇の権威を強調し,仏教を国家統治の原理としている。

当時,東アジア情勢は大きくゆれていた。朝鮮半島では高句麗・百済・新羅が強大化し対立抗争を続け,そのあおりで日本は任那を失った。



6世紀末,対朝鮮外交は馬子の主導で行われていた。

太子には高句麗の慧慈(仏教の師),百済の覺智(儒教の師),新羅系渡来人の秦河勝の側近がいた。太子はこの3人からバランスのとれた東アジア情勢を知りえた。589年隋は中国を統一した。そして太子は600,607,608,614年の4回遣隋使を派遣した。太子は対隋外交に本腰を入れるため601年斑鳩に宮殿をつくり,20キロ離れた飛鳥から605年に移住した。斑鳩は大陸への門戸である難波へは大和川の水運を利用できる好位置にある。また大和と難波をつなぐ道路の一つ竜田道が通っている。太子の遣隋使派遣が本格化するのには地の利をえた斑鳩における側近たちとの東アジア情勢の分析にもとづいている。

すでに581年百済・高句麗は朝貢し,594年新羅も朝貢して,隋と冊封体制(君主一臣下関係)に入った。607年突厥の可汗(王)が煬帝に朝貢してきた。その後直ちに突厥防衛の長城を構築した。同年百済が高句麗攻撃の許可を求めてきたので煬帝はそれを許可し,高句麗の動静をさぐるように命じた。高句麗に対しては父文帝が陸海30万の大軍を送ったが流行病と食糧輸送難と大風にあって失敗していた。

契丹・林邑(ヴェトナム)・吐谷渾(青海省)を討伐した煬帝は高句麗遠征を決意し,その準備をはじめた。

太子の外交政策

好機いたれりと判断した太子は,小野妹子を隋に派遣した。妹子が携行した国書には「太陽の昇る国の天子が,太陽の没する国の天子に書を送ります。お変わりありませんか…」とあった。(煬帝は不機嫌になり,外務大臣に「なにが対等外交か。大変無礼である。今後二度ととりつくな」と激怒した。しかし翌608年,妹子の帰国に際して答礼使として世清ら13人を遣わした。妹子は裴世清を送って再び訪隋するが,このときの国書は「東の天皇つつしんで西の皇帝に言上します…」という書き出しであった。

煬帝は太子の対等外交要請には激怒したものの,高句麗遠征準備中に,日本が国交を求めてきたことは隋にとって有利と判断した。小野妹子が冠位第1階の大札に対して文林郎(文庫の官吏)という低い身分の裴世清を答礼使に選ぶなどの優越感配慮を示しながら太子の申し出を受けた。日本の天皇の称号は,中国の冊封体制外のことで問題にならない。しかも,臣下ではない日本が隋の礼と徳を思慕して朝貢するかぎり,徳化につとめるのが中国皇帝の慈愛行為であると煬帝は考えた。

太子の外交を日本側から評価してみる。5世紀,倭の五王は,南朝に遣使朝貢し,安東大將軍などの称号を請願し,中国との冊封体制の中で朝鮮半島における軍事支配権を確保しようとした。太子は日本を中国の冊封体制外に置いて自らを権威づけ,しかも礼をもって中国への接近をはかった。煬帝の答礼使派遣は天皇に敬意を表したことになり,諸豪族・官僚群は天皇の権威をまざまざと知ったことになり,中心の国家づくりを,煬帝との対等外交の成功によって軌道にのせた。隋はまもなく滅んだが,このとき派遣された日本の留学生たちは,ひきつづき唐の留学生となり,帰国後は大化の改新と日本文化の向上に寄与した。